# 私の履歴書

谷口 吉生

①

## 父と同じ道

## 建築 自分の子供のよう

### NY近代美術館などを設計

1939年10月18日、横浜港――。

母の腕に抱かれた2歳の私は、突然激しい熱さを頬に感じ、大声で泣き叫んだ。欧州からの最後の帰国船「靖国丸」の出迎えでごった返す港で、母は夢中で父の姿を探している。そんな中、隣の人のタバコの火が私の頬に触れたのだ。

若い建築家の父は外務省嘱託として日本大使館の庭を設計するため、38年秋にベルリンに渡った。翌年8月27日、戦争の危機が迫る中で帰国を決意し、小さなボストンバッグ一つを携えドイツを後にする。ハンブルク港を出港した靖国丸を追いかけ、陸路でノルウェーのベルゲンへ。停泊中の船に乗り込んだ翌日の9月1日、ドイツによるポーランド侵攻を知る。200人を超す同胞とともにベルゲンを発ったのは3日後のことだ。

横浜で父を出迎えた私たちは東京の家に戻り、その晩、集まった親戚や友人と夕飯を囲んだ。私はこの時、誤って刺身のわさびを口に入れてしまい、2度目の大泣き。タバコの熱さとわさびの辛さが、私の人生最初の記憶である。

37年10月17日、東京で生まれた私は「3代目」の建築家である。母方の祖父は東京駅の設計に参画した松井清足。父は東宮御所や東京国立博物館東洋館などを手掛けた谷口吉郎。東京帝国大学（現・東京大学）を卒業し、新進の建築家として活躍するかたわら東京工業大学で教鞭をとる父に対しては、とてもかなわないという思いから、私は建築家以外の道に進もうと考えていた。

ところがその後、建築の道に進み、独立してからすでに40年余りになる。これまで設計者を選ぶコンペティション（設計競技）などにはほとんど参加してこなかった。それにもかかわらず私を建築家として信頼し、設計の機会を与えていただいた国内外の多くの方々には感謝したい。

建築の設計は個人の創造力によるものであるが、建築家一人で実現はできず、技術コンサルタント、私の研究所のスタッフ、そして現場での多くの施工担当者との協働が不可欠である。こうした人々に支えられながら、ひたすら建築を造り続けてこられた。

私には子供がいないせいもあり、設計した建築はすべて自分の子供のような気がしている。試行錯誤しながら設計し、工事現場に通い詰め、協働で造りあげる作業は、子育てと似ているのではないかとも思う。私はよく自分が手掛けた建築の様子をそっと見に行く。生まれた土地に後を託してきた子供がどう育っているかが気になるからだ。ご迷惑をおかけしている子もいるのではないかと心配もするが、年を重ねつつ生き生きと活躍している姿を見るとほっとする。

最近の筆者

これまで東京都葛西臨海水族園、東京国立博物館法隆寺宝物館、京都国立博物館平成知新館など数多くの公共建築、海外ではニューヨーク近代美術館（MoMA）、米国ヒューストンのアジアハウスなども設計した。そして建築を通してのみ自分を表現することを心がけ、自分自身や設計については極力、語らないことを主義としてきた。その思いは今も変わらないが、父が74年2月に連載した「私の履歴書」の続編となるべく、これまでの人生を振り返ってみたい。

（建築家）

＝題字も筆者



# 私の履歴書

谷口 吉生

②

## 芸術と縁深く

## 祖父、九谷焼の窯元営む

### 母方の親族も建築関係多く

犀川、浅野川の2つの清流が町中を通る北陸の古都・金沢は父方の故郷であり、私が最も好む町のひとつである。

曽祖父が江戸時代に創業し、祖父の吉次郎が継いだ九谷焼の窯元「金陽堂」は犀川のたもと、商家が並ぶ金沢の片町にあった。明治期には外貨獲得を目的に伝統工芸品の輸出が奨励され、金陽堂も大変繁盛したようである。祖父は生涯で2度、渡欧。九谷焼を各国の万博に出品して受賞を重ね、日本の陶磁界の代表としてロンドンにも赴いた。3年前に101歳で亡くなった叔母から神戸に支店を出したことや金沢での生活ぶりなどを聞いた。

祖父は「翠園」の雅号で絵を描き、能や句作、囲碁などに親しんだ。画家や工芸家を自宅に招き、パトロンとして支援もしたようである。父が芸術に関心を向けるのは自然のなりゆきだったろう。子供のころから能や茶道に接し、庭づくりに興味を持つ。初めての東京見物で丸ビルや帝劇など近代建築に心引かれ、後の関東大震災で多くの建築が倒壊したことを知り建築家を志す。

母方の祖父、建築家の松井清足は名古屋の出身である。1903年に東京帝国大学工科大学建築学科（現・東京大学工学部建築学科）を卒業。辰野葛西事務所で建築家の辰野金吾の下で東京駅の設計に主任として携わった。

東京駅の完成を待たず海軍技師になったが、作家の東秀紀氏の小説「東京駅の建築家 辰野金吾伝」にはレンガ造りを主張する辰野に対し、松井が鉄筋コンクリートを推したと書いてある。工法をめぐって対立、松井が毅然と事務所を去ったという話である。祖父は晩年、東京駅の工事を担当した大林組の東京支店長や日本建築学会副会長を歴任し、48年に亡くなった。

私の父は31年に松井の次女である母、絹子と結婚。東京帝大の恩師で、建築家・構造学者の佐野利器と松井が帝大の同窓だった縁だ。

父方、母方ともに芸術や建築と縁の深い一族だった。父の妹の夫、五井孝夫は帝大建築学科で建築家の前川国男や父と学んだ同級生。当時の大蔵省に入省し、戦争中はインドネシアのスマトラに出征。戦後、金沢に建築構造事務所を創設した。いとこの土屋正明も所員であった事務所は、今も問屋町の五井建築研究所として残る。母の兄、松井汲夫は企業で長く活躍したグラフィックデザイナーで、女子美術大学で教鞭もとった。

そんな両親や親類の影響を私の姉と妹も多分に受けている。姉の真美子は女子美術大学を卒業し、裏千家家元で14代宗室の次男、納屋嘉治と結婚。妹の真紀子は慶応義塾大学で美学、東京芸術大学大学院で文化財保存を学んだ文化財保護の専門家だ。夫は日本画家・杉山寧の次男、晋。彼自身は事業家だが、絵もめっぽうまい。

祖父が経営した「金陽堂」

さて、金沢の話に戻ろう。父はぽたん雪が降り積もる古里の冬の美しさを好んだ。川のある街の、墨絵のようなモノクロームの雪景色は本当に美しい。冬空に舞う雪が濃くなり薄くなるにつれ、川向こうの景色がかすんでまた浮かび上がるのを、私も町家の窓などから飽かず眺めることがある。

しかし、金沢で過ごした幼少時代の記憶は暗くて寂しいものばかり。これほど金沢に愛着を持つようになるとは思わなかった。

（建築家）

# 私の履歴書

谷口 吉生

③

## 疎開

## 小1 金沢の祖父母宅に

### 空襲警報、暗闇の中を避難

子供のころ、東京から金沢までは夜行列車で一晩かかる長旅だった。

上野駅を出発すると寝台車は群馬県、長野県境の難所、碓氷峠にさしかかる。横川駅で停車し、急勾配を登るためのアプト式の機関車を最後尾に取り付けて軽井沢まで押し上げる。早朝に富山駅に着くと列車を降り、すぐ真っ黒の顔を洗った。

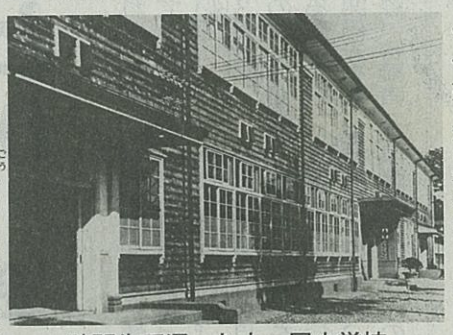
1944年、小学1年の私は母と姉、生まれたばかりの妹とともに金沢の祖父母の家に疎開した。長男である父が東京で建築家になり、東京帝国大学で経済を学んだ次男、吉二を病で失い跡取りをなくした祖父は、「金陽堂」を閉めていた。空襲が始まりつつあった東京に比べれば穏やかな日常が続いたが、楽しかった思い出はほとんどない。

犀川を見下ろす寺町の旧家は日中も薄暗い。冬は深い雪に閉ざされ、一層どんよりした空気に包まれる。父が設計した東京の自宅はテラスや床暖房のある明るい家だったので、なおさら祖父の家は暗く感じた。金沢の雪は突然の雷とともに降り始め、稲妻が光り雷鳴がとどろくたびに怖い思いをした。

夏は犀川でゴリを捕って遊んだりしたが、ヒグラシの鳴く夕方にはきまって心細くなる。しっかり者の祖母に「吉生はいつもセミと一緒に泣く」と言われると、さらに悲しくなって涙があふれた。

寺町沿いの道を15分ほど歩いたところの十一屋町国民学校（現・十一屋小学校）に通ったが、戦争がひどくなり三馬国民学校（現・三馬小学校）に転校。かつて三馬村とよばれた農村で、家族4人の暮らしが始まった。町の小学校とは雰囲気もちがい、雪の降る田んぼを竹スキーで走り回るようなわんぱくな子供が多い。川にかかる丸太の一本橋を駆け抜ける友を、私は必死ではって渡って後を追った。

寺町は祖父が座敷で食事をとる間、女性たちが板の間に控えているような封建的な家だったが、長男の私は優遇され祖父と並んで座った。三馬に移ってから母は夜遅くに近くの農家で芋や野菜を分けてもらうようになる。典型的な都会育ちの母には戦時中の暮らしはつらかったに違いない。空襲警報が鳴ると妹をおぶって姉と私の手を引き、暗闇の中を防空壕や畑に避難する。畑の中にしゃがんでいると富山や福井の方角の空が赤くなる。「次は金沢かもしれない」「いや、文化の町だから空襲はないだろう」。近所の大人たちの声が聞こえてくる。



疎開先で通った十一屋小学校

福井の空襲から約1カ月後に終戦。しかし、疎開地から東京に戻るには移動の許可証が必要だった。「イドウショウメイトレタ」。父からの電報に小躍りする母の姿は今も目に焼き付いている。戦争中、東京工業大学教授の官職にあった父は軍関係の設計の仕事に携わったようである。回顧録によると詩人の木下杢太郎を中心とする詩と美術の同好会で雑草まじりの雑炊を共にすすり、精神的ななぐさめを得ていたという。

翌年、小学3年の私は東京第一師範学校男子部付属小学校（現・東京学芸大学付属世田谷小学校）に復学。最寄り駅は第一師範駅（現・学芸大学駅）。がらんどうの焼け野原を横切り鉄筋コンクリート建ての校舎に向かう途中の地面には、溶けたガラスや鉄くずが転がっていた。

（建築家）

# 私の履歴書

谷口 吉生

④

## 父設計の自邸

### たえず改修中の状態 母嘆く

東京の洗足という私鉄の駅近くに、父が設計した自邸がいまも残る。数寄屋風の外観からは、この家が当初、銀色で箱形のモダン建築であったことを想像するのは難しい。

父は大学院を卒業すると恩師の佐野利器先生の勧めで東京工業大学に職を得た。講師からすぐに助教授となり、1932年にはデビュー作となる「東工大水力実験室」を設計している。洗足地区は田園都市（現・東急電鉄）が最初に手掛けた住宅分譲地で、勤め先の大学から電車で一駅、歩いて15分ほどの距離にあった。ここに35年、家を建てた。

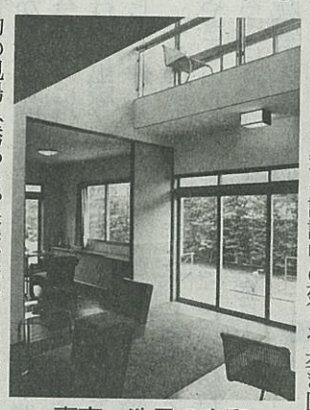
外壁をアルミニウムペンキで銀色に塗り、水平な金属屋根をのせた2階建ての木造住宅。ぜいたくな家ではなかったが、日本の気候風土を考慮したさまざまな工夫が凝らしてあった。窓を大きくとったり、居間や浴室にも、当時は珍しい床暖房を取り入れている。中央に吹き抜けがある居間には、ひもを引くと天窓が開き、日差しがたっぷり差し込んだ。2年後に慶応義塾幼稚舎の校舎を設計した父は自邸での経験を生かし、児童が健康的に過ごせるよう教室前にテラスをつくり、フロアヒーティングを導入している。

## 工法や材料 実験の場に

父が新しい建築を手掛けるたびに家も変わった。さまざまな工法や材料をまずは自邸で試したので、たえず改修中の状態だった。母は「落ち着かない」と嘆いていたが、いわば原寸大の模型のようなものだったのだろう。64年末に私が米国留学から帰国した時には、これが我が家かと目を疑った。構造はそのまま、まったくの和風建築に様変わりしていたからだ。

戦前のドイツでカール・フリードリッヒ・シンケルという19世紀の建築家の作品に接したことは、建築に対する父の考え方に大きな影響を与えた。シンケルはギリシャ建築を参照する新古典主義の建築家とみなされるが、歴史をふまえた上でドイツの同時代的な建築を追求していると父は直感した。父が目指したのも懐古趣味としての和風建築ではなく、日本の伝統的な様式に現代性を見いだし建築に生かすことだった。自邸はそうした父の生涯を通した目標の軌跡である。

建築家という職業を勧められたことは一度もなかったが、父はよく私を設計中の建物の現場へ誘った。慶応義塾大学の学生ホールや新萬来舎、秩父セメントの工場――。建築が立ち上がりつつある建設現場には、気持ちを高揚させる何かがあった。大工や左官職人のそばに座って、彼らがくぎを打ち、壁を塗るのを食い入るように眺めた。建築は工学と美学の結晶であり、大勢の人と共に作りあげる芸術でもある。父は建築の本質のようなものを、私に感じ取らせようとしたのかもしれない。



東京・洗足の自邸

都内で開かれる展覧会や歌舞伎公演などにも連れていかれた。小学生のころは美術館を歩き回ってくたびれた思い出の中で、必ず帰りに立ち寄った銀座の中華料理店の食事だけが楽しい記憶である。復興途上の東京は色彩に乏しく、町行く米兵が持つタバコのパッケージの色鮮やかさに目を見張った。

強烈な印象として残るのは51年、東京国立博物館で開かれた「マティス展」。さまざまな色が躍動する絵を見ながら、世の中が変わりつつあることを子供ながらに感じていた。

（建築家）